



“源溪山だより”

<https://chouanji.p-kit.com/> 令和8年9月①
住職 恩田仁志 gen-chouanji@aka2.gmobbb.jp



◆生涯現役で

『一日作さざれば、一日食らわず』

これは、唐の時代の名僧百丈禪師にまつわる有名な言葉です。一日働かなかつたら、一日食べませんという意味で、ことわざあるいは慣用句として使うこともあります。

もともとの逸話は次の通りです。

百丈禪師は晩年に到るまで、一生懸命、若い僧侶といっしょに畑仕事などの作務をしていました。あるとき、ご高齢にもかかわらずあまりにがんばっておられることを心配した周りの人が、身体を気遣って作務の道具を隠してしまいました。

すると禪師は部屋に引きこもり食事をしなくなっていました。「どうして、お召し上がりにならないのですか」と聞くと、「一日作さざれば、一日食らわず」とお答えになりました。



「今日仕事をしなかったならば、申し訳ない。今日一日、精一杯生きないならば、せつかくこの仏様の命をいただいているのに申し訳ない」というお気持ちだったと思います。

逸話に書かれた作務は農作業ですが、現在、慣用句としては、日々の仕事、役割、学びをおろそかにしないための自戒の言葉として使われます。

「今日はちょっと疲れたから、まあいいか」、「誰かがやってくれるだろう」、そんな気持ちになる日もあります。

今日という日に何をするか、どれだけ誠実に社会

の中で生きるかが問われます。それは決して汗を流した労働だけではありません。

今月の塔婆裏文は、「老鶴萬里心」としました。“ろうかくばんりのところ”と読みます。

これは唐の時代の杜甫の詩からきた禅語で、「鶴は歳を取ってもなお千里を飛ぶ心を持っている」という言葉です。

目標を持つこと、挑戦する事は、歳に関係なく大切なこと。生涯現役と前向きにとらえ、社会と関わり、志を持って生きていきましょう。

老
鶴
萬
里
心

◆秋のお彼岸法要

早いもので、秋の彼岸が近づいてきました。

中日にあたる秋分の日、法律に次のように定義されています。

「祖先をうやまい、なくなった人々をしのぶ。」



秋のお彼岸法要を次の通りお勤めします。どうぞお参りください。

9月20日(日) 16:00～

9月23日(祝・水) 16:00～

一品運動への善意の品々が集まりつつあります。彼岸明けに届けますので、それまでにお持ちいただくと喜びます。

